

# ヤスパースにおける哲学的信仰と包括者思想の関係について —実存の倫理性との関連において—

豊泉 清浩\*

## The Relationship between the Philosophical Faith and the Concept of Encompassing according to Jaspers: In Relation to the Ethics of Existence

Seikou TOYOIZUMI

**要旨** ヤスパースにおける哲学的信仰は、科学と啓示信仰との間で、哲学することを根源とする信仰である。彼は、信仰について考察する際、主観と客観を包括する包括者を前提とする。したがって、哲学的信仰の概念を獲得するためには、包括者を解明しなければならない。

本稿では、ヤスパースの著書『哲学的信仰』（1948）と『啓示に面しての哲学的信仰』（1962）における論述に依拠して、哲学的信仰の概念、哲学的信仰の内容、科学と哲学と神学の関係、包括者の諸様式、哲学的根本知と哲学的根本操作、哲学的信仰と包括者の関係などについて考察する。その際、哲学的信仰を人間の倫理的生き方を根拠づけるものと捉える。それゆえ本稿の目的は、哲学的信仰は包括者の諸様式の哲学として、実存の倫理性を示唆するものであることを明らかにすることにある。

**キーワード：**ヤスパース 哲学的信仰 包括者 実存 倫理性

### はじめに

ヤスパース (Karl Jaspers, 1883-1969) の哲学は、実存へと超越することを目指す哲学として成立したが、後期の最初の著書である『理性と実存』（1935）以降、実存とともに理性を重視する傾向が強くなる。この『理性と実存』は、ヤスパースの後期哲学で定式化されることになる「哲学的論理学 (die philosophische Logik)」と「哲学的信仰 (der philosophische Glaube)」の両概念について論及している。両概念は、理性の重視により、「包括者 (das Umgreifende)」の概念を基礎に構成されたものである。

本稿では、ヤスパースの著書『哲学的信仰』

(1948) と『啓示に面しての哲学的信仰』（1962）における論述に依拠して、哲学的信仰の概念、哲学的信仰の内容、科学と哲学と神学の関係、包括者の諸様式、哲学的根本知と哲学的根本操作、哲学的信仰と包括者の関係などについて考察する。その際、哲学的信仰を人間の倫理的生き方を根拠づけるものと捉える。それゆえ本稿の目的は、哲学的信仰は包括者の諸様式の哲学として、実存の倫理性を示唆するものであることを明らかにすることにある。

### 1. 哲学的信仰の概念

ヤスパースは、キリスト教のように神の啓示に基づく啓示信仰と哲学的信仰の相違を考慮して、哲学的信仰の特徴を次のように述べている。「哲

\* とよいずみ せいこう 文教大学教育学部教職課程

学的信仰は、固有の根源である。だが、哲学的信仰は、啓示を理解できないにもかかわらず、啓示を別なものに対する可能性と見なす。哲学的信仰は、悪意ではなく誠実を望み、断絶ではなく交わりを望み、暴力ではなく寛容を望む<sup>1)</sup>と。ヤスパースによれば、哲学的信仰は、思惟する人間の信仰であり、常に知識と結びついているのみあるという特徴を持っている<sup>2)</sup>。哲学的信仰は、知りうるものを知ることを欲し、自分自身を見抜くことを欲する。したがって、限りなく認識することである科学は、哲学することの根本要素である。さらに、哲学的信仰は、自分自身を解明することを欲する。信仰は、確かに普遍妥当な知識にはなりえないが、しかし自己確信によって私に現代的になるべきである。

ヤスパースは、「信仰においては、私が確信を抱く信仰と、私がつかむ信仰内容とは不可分である。——すなわち、私が遂行する信仰と、私がその遂行の中でわがものとする信仰とは——つまりそこから信ずることがなされる信仰と、信じられている信仰とは不可分なのである」<sup>3)</sup>と述べている。したがって、確かに信仰は常に、ある物への信仰である。信仰は、われわれが主観と客観として分離するもの、すなわちわれわれがそこから信じる信仰と、それを信じる信仰として分離するものの中で一つのものなのである。

それゆえヤスパースは、信仰について語る際には、このような主観と客観を包括するものを念頭に置くことになると指摘する。このような主観と客観を包括する存在を、ヤスパースは包括者と名づける。「われわれは、単なる主観でも単なる客観でもなく、むしろ主観-客観-分裂の中で両方の側にある存在を、包括者と名づける。包括者は適当な対象となりえないにもかかわらず、われわれは哲学することにおいて、包括者から語り、包括者を目指して語る。」<sup>4)</sup> ヤスパースによれば、信仰とは、悟性によって媒介されるすべてのものとは対照的に、一種の直接性であるように思われる。信仰とは、一つの体験、すなわち私に与えら

れたり、与えられなかったりする包括者の体験である。

ヤスパースは、信仰の本質について、キルケゴールに依拠して次のようにいう。「キルケゴールは、信仰の特徴を、信仰が歴史的一回性に関係づけられていて、それ自身歴史的存在であるという点に見ている。信仰は体験ではなく、また人が与えられたものとして記述することができる直接的なものではない。信仰はむしろ、歴史と思惟の媒介を通じた、根源からの存在の覚知である。」<sup>5)</sup> 哲学的信仰は、このことを自覚している。だから哲学的信仰の思想は、教義とはならない。哲学的信仰の実質は、絶対に歴史的存在であり、ただ哲学的信仰だけが現われうる一般的なもののの中では、確定されるべきではない。したがって哲学的信仰は、歴史的な状況の中で繰り返し根源から自分のものにしなければならない。むしろ哲学的信仰は、思惟し根拠づけるという仕方でも自分自身を示さなければならない。

ヤスパースによれば、「信仰の概念を獲得するためには、われわれは包括者を解明しなければならないであろう。」<sup>6)</sup> 包括者は、われわれが解明しようとする、包括者の諸様式という形で多重性を持つものとして姿を現わす。包括者は、われわれが包まれている存在そのものであるか、あるいはわれわれである存在であるかのいずれかである。

われわれを包んでいる存在は、世界と超越者といわれる<sup>7)</sup>。

われわれである存在は、現存在、意識一般、精神といわれ、さらに実存といわれる<sup>8)</sup>。

全体としての世界は、対象ではなく、一つの理念である<sup>9)</sup>。

超越者は、決して世界とならない存在であるが、世界内の存在を通していわば話しかける存在である<sup>10)</sup>。

われわれは現存在である<sup>11)</sup>。

われわれは、主観と客観の分裂の内にある意識一般である<sup>12)</sup>。

われわれは精神である。すなわち精神的な生は、理念の生である<sup>13)</sup>。

われわれは可能的実存である<sup>14)</sup>。

ヤスパースは、私である包括者は、おのおのの形態において主観と客観の両極性であると考え、主観と客観を対比させて次のように述べている。「すなわち私は、現存在として、内界と外界であり、意識一般として、意識と対象であり、精神として、私の内にある理念と諸々の事物からの意に添う客観的な理念であり、実存として、実存と超越者である。」<sup>15)</sup>

さて、これらの両極性の中の現在の存在は、最も広い意味での信仰といわれる。現存在は、われわれにとってあまりに当然なので、私が現に存在し事物が現に存在しているという実在性の単純な意識の内にある秘密は、われわれにとってたいは現在のでない。意識一般として私は、正しいものの妥当性を経験する。精神として私は、意に添う理念を受け止める諸々の理念によって満たされる。「実存として私は、超越者によって贈られている私自身を心得ていることによって存在する。」<sup>16)</sup>

ヤスパースによれば、われわれは、実在の確実性、明証性、理念をより広い意味での信仰と呼ぶだろう。現存在として本能のような何かが、意識一般として確実性が、精神として信念が存在する。「しかし真の信仰は、超越者とその現実性の中で意識される実存の活動である。」<sup>17)</sup> ヤスパースは、哲学的信仰の核心について次のようにいう。「信仰は、包括者からの生き方であり、包括者による導きと成就である。」<sup>18)</sup> したがって包括者に基づく信仰は、固定されたものではない。「包括者からの信仰は、ある絶対化された有限なものの中に固定されないの、自由である。」<sup>19)</sup> それゆえ、ヤスパースによれば、「信仰について語ることは、常に避けられずにある続ける対象的な思惟の中で、すべての対象性を越えることによって包括者を確かめるための哲学的根本操作を必要とする。」<sup>20)</sup>

ところで、哲学的信仰は、迷信に対して感じやすい良心、すなわちこうしたある一つの客体への信仰とともにあり、その理由から、諸々の教理における告白に対して適格ではない。ヤスパースによれば、「したがって哲学的信仰は常に、一体化し止揚する弁証法の内にある。」<sup>21)</sup> 弁証法にとって、そこに本質的な意味からの諸矛盾が存在するということが、一つの共通な点である。哲学的信仰は、それ自身の内にそのような弁証法の構造を持っている。「現存在や精神や世界の諸矛盾は、一種の調和する全体の幻想の中で宥和し、それでこの幻想は、虚偽に対する実存の憤激によって突破される。」<sup>22)</sup>

またヤスパースは、「哲学的信仰は伝統の内にある」<sup>23)</sup> という。したがって哲学は、その歴史によって規定され、それで哲学史はその都度、現在なされるような哲学することを出て一つの全体となる。彼は、「永遠の哲学は、時間の中ではどこにもすでに獲得されていないが、この永遠の哲学は、哲学することの理念の内に、また唯一の現在となる三千年の哲学の歴史としての、哲学の真理の全体像の内に、常に存在している」<sup>24)</sup> と述べている。

ヤスパースによれば、「哲学が信仰告白となり、諸々の教義に固定され、学校教育を制度上の共同体に基礎づける場合、また哲学が伝統を権威とし、学派の指導者を英雄化する場合、さらに哲学が弁証法的に拘束を受けないことの遊戯に陥る場合、哲学はなんと軽率に滑り落ちることであろうか。」<sup>25)</sup> 哲学的信仰は、冷静さと同時に徹底的な誠実さを求める。したがって、「常に根源的で、他のものの内に自分自身を再認識することができる哲学的信仰からのみ、哲学の歴史における滑り落ちることの雑然を通して、哲学の歴史の中に現われる真理への道が、見出されるべきである。」<sup>26)</sup> 哲学的信仰は、哲学史を通じて人間がどう生きるべきかという真理を見出そうとする。



## 2. 哲学的信仰の内容

ヤスパースによれば、哲学的思考は、端緒においてはあらゆる人間によって、時には子どもたちにおいて最も純粹に実行される。そのような思考過程を見出し、それらを明らかにし展開すること、そしてそうした思考過程を数千年の間に思惟されたものの再認識において反復することが、一つの職業的な手職となる思惟としての哲学の責務である。「そのために、第一に信仰内容の範囲に対する省察（方法的な熟慮）、第二に信仰の内容そのものに対する省察が必要である。」<sup>27)</sup>

ヤスパースによれば、哲学的信仰の内容の範囲は、次の四つの問いによって開かれてくる。第一の問いは、「私は何を知らぬのか」である。その答えは、「私が知っているすべては、主観-客観-分裂の内であり、私にとっての対象（客観）であり、現象であって、それ自体として存在しない」<sup>28)</sup>ということである。しかし、主観-客観-分裂の内では、客観と主観は結び合わされている。「したがって、私が存在として経験するものは、常に主観-客観-分裂の全体の内であり、ただ一つの側面だけにあるのではない。」<sup>29)</sup> ヤスパースによれば、主観-客観-分裂は多重である。すなわち、現存在は外界としての現存在の世界の内であり、意識一般は対象と向かい合っており、精神は諸々の理念の内には生きていく。実存は超越者に関係づけられている。しかし、外界、理念、超越者は、意識一般の中で初めて、諸々の型や象徴で対象化されることによって思惟された客体となる。「だから私が知っているものは、その都度意識一般の中での一つの客観存在であり、それで限定されている。しかし、私が知っているものは、その有限の中で超越することへの可能な踏み台である。」<sup>30)</sup>

第二の問いは、「何が本来的に存在するのか」である。ヤスパースは、存在への問いに対する典型的ないくつかの答えや、あらゆる存在論に対する不満について述べた上で、本来的存在をどのように捉えるかに言及する。「客観でも主観でもな

く、主観-客観-分裂の全体において現象する本来的存在、また範疇に意味と意義を与えるために、範疇を満たさなければならない本来的存在を、われわれは包括者と名づけた。」<sup>31)</sup>したがって、何が本来的に存在するのかという問いは、包括者の諸様式、すなわち世界と超越者、現存在、意識一般、精神、実存の解明を通して、その答えを見出さなければならない。「しかし、すべてのこれらの様式は一者において基礎づけられる限り、結局、本来的存在は超越者（あるいは神）であるという答えである。」<sup>32)</sup>

第三の問いは、「真理とは何か」ということである。その答えは、「われわれである包括者の各々の様式の中に、真実存在の固有の意味が定着している」<sup>33)</sup>ことである。現存在においては、感覚的な現在の直接性としての、生命にかかわる有用としての、本能としての、実践的なものと時宜を得たものとしての真理が存在する。意識一般においては、普遍的な範疇の中で対象的に考えられるものの矛盾しないこととしての真理が存在する。精神においては、理念の確信としての真理が存在する。実存においては、真の信仰としての真理が存在する。信仰は、超越者と関係している実存の意識といわれた。

第四の問いは、「私はどのようにして知るのか」ということである。ヤスパースによれば、懐疑が起こる時、私は根拠づけを欲する。私は、私がどのように知るのかという仕方に応じて問い、このような知識の意味と限界に応じて問う。その時、あらゆる真理は、思惟の独特な仕方によって現にあることが明らかになる。「この考え方は、範疇論や方法論の中で自覚される。範疇論と方法論をもって、私は哲学することの見取図を手に入れ、その見取図を熟知することによって、私は単に知るだけではなく、私がどのように知り、何によって知るのかということを知るのである。」<sup>34)</sup> その際、哲学することによって、より特別な、それどころかより決定的な意義から、諸科学で遂行されるような对象的に認識していく思惟と、哲学にふさわ

しい超越していく思惟との相違を確かめることが存在する。対象的に消滅していくものにおいて、哲学者は確かに本来的存在をつかむことができないが、しかし本来的存在によって満たされることができる。

ヤスパースは、哲学的信仰の内容は、次のような命題で表現することができるとする<sup>35)</sup>。

神は存在する。

無制約的な要求がある。

世界は、神と実存との間で消滅していく現存在である。

まず、「神は存在する」という命題に関して、「すべての世界を超越している超越者、あるいはすべての世界よりも先にある超越者は、神と呼ばれる。」<sup>36)</sup> ヤスパースによれば、今日では、神は存在するということの証明を新たに哲学的にわがものとするのが、差し迫った必要性である。

次に、「無制約的な要求がある」という命題に関して、「無制約的な要求は、私を支えることによって、私の内にその根源を持つ。」<sup>37)</sup> つまり無制約的な要求は、実存が発する要求である。「私の意志の根拠が無制約的な根拠であるならば、私は、その無制約的な根拠を、私が本来的に自己自身であるものとして、また私の現存在がそれに合致すべきものとして、覚知する。」<sup>38)</sup> 自己は、無時間的な実存が、時間の内での現存在を導くことを自覚する。無制約的なものそれ自身は、時間的なものではない。「無制約的なものは、われわれの自由を越えていく途上で、超越者からこの世界の中へ突然現われ出る。」<sup>39)</sup>

さらに、「世界は、神と実存との間で消滅していく現存在である」という命題に関して、ヤスパースは、「全体としての世界は、われわれにとって対象とならない」<sup>40)</sup> と述べている。それに反して、世界の非閉鎖性と無地盤性を確かめることがあり、それと共に、世界存在のすべての様式に関して、また常にまだ終わらない人生の時間上の経過の中での出来事や自分自身が行なったことに関して、絶え間なく聞くことの覚悟がある。

次のことが、そのような覚悟と結びついている<sup>41)</sup>。

第一に、世界に対する神の絶対的な超越性を確かめること。

第二に、神の言葉としての世界の経験。

ヤスパースは、「このような信仰にとって、時間の中でのわれわれの存在は、実存と超越者との出会い——すなわち、創造されたものとして、また自分自身に贈られた存在としてわれわれが存在する永遠なものと、それ自体として永遠なものとの出会いである。永遠であるものと一時的に現象するものとの出会いが、世界の中で出会う」<sup>42)</sup> と述べている。「しかし、実存と超越者との出会いは、世界の中での出会いであるので、時間のために世界に拘束される。」<sup>43)</sup>

ところで、ヤスパースは、包括者の空間を示すことや、信仰内容を表わすことについてとにかく未決定に留まっている諸命題の指摘をもってしても、哲学的信仰は十分に特徴が示されないと考える。彼によれば、哲学は、根源と目標の間の中間存在である。われわれの内面には、この哲学する道の途上でわれわれを導いていき、真に哲学的に生きるために働く理性がある。ヤスパースは、理性と真理との関係について、「理性は、真理の意味のすべての様式を、それぞれを有効にすることによって、互いに生み出す」<sup>44)</sup> と述べている。そのため、理性は、包括者のある一つの様式を孤立させ、絶対化するあらゆる信仰が誤りになることを理解する。「理性は、すべての真理を含んでいない、真理の何かある意味に自分自身を固定することを拒む。」<sup>45)</sup>

ヤスパースは、理性が対立するものをも包含する性質を持つことについて次のように述べている。「理性はその上に、何物も墮落させないこと、存在するすべてのものとの関係へ入ること、あらゆる限界を越えて存在するものと存在すべきものを求めること、さらに諸対立を包含すること、常に全体、すなわちあらゆる可能な調和を把握することを強いる。」<sup>46)</sup> 理性の根底は、知的な詭弁法の果てしなさにおいて影響を及ぼす破壊意志で

はなく、諸々の意味内容の無限に対する開放性である。「悟性は、途方もない思惟として虚無的となり、理性は、実存に根拠づけられたものとして、ニヒリズムの前でも救いである。なぜなら、理性は、世界存在の具体性の中で悟性を伴う理性の動きによって、二律背反や突破や分裂という深淵の内で結局再び超越者を確信することになるための信頼を守るからである。」<sup>47)</sup>

ヤスパースによれば、「理性は、いかなる本来の根源も持たず、実存の道具である、われわれの内なる包括者である。」<sup>48)</sup> 理性は常に、実存と結びついて機能する。「哲学する者は、自分にとって成功するものを実行する理性を賛美するだけでは足りない。理性は、包括者のすべての様式の紐帯である。」<sup>49)</sup> そこでは、普遍的な共に生きることが生じ、親しみやすく自分自身に関係させられることが生じる。理性は、他者との関係を開く。つまり、「理性は、限らない交わりを要求し、理性自身が全体的な交わりの意志である。」<sup>50)</sup> なぜなら、現存在は他の現存在とともにのみ可能であり、実存は他の実存とともにのみ自己自身に到達するからである。このような意味で、ヤスパースは、哲学的信仰を「交わりへの信仰」<sup>51)</sup> とも呼ぶことができると考える。

### 3. 科学と哲学と神学

ヤスパースは、理性的認識と信仰的認識との古い対立に代わり、現代では、科学、哲学、神学という三分類で捉えたと指摘する。彼は、哲学に対する現代の科学性の結果に関して、近代科学の特徴を次のように理解している<sup>52)</sup>。近代科学とは第一に、その都度の方法に関する知識と共にある方法的認識である。第二にそれは、強制的に確実である。第三にそれは、普遍妥当的であるが、より厳密に言えば、あらゆる以前の認識のように、要請においてのみではなく、事実上も普遍妥当的である。すなわち、ただ科学的認識だけが、あらゆる人にとってわかりやすいものとして普及する。第四にそれは、普遍的である。

ヤスパースによれば、科学性は、知識と共に、同時に知識の限界を知っている。普遍的な科学性は、普遍科学ではない。哲学と神学は、その形態、その自己意識、その方法の明確さを、普遍的科学性によって新たに発生する状況の制約の下で、変えなければならない。「哲学は、もはやそれ自体科学ではない。哲学は、科学と啓示信仰との間の、一つの独立した根源である。」<sup>53)</sup>

ヤスパースは、哲学は、近代諸科学の意味での科学ではないと指摘する。近代諸科学に属するのは、むしろ哲学から排除される。「哲学に依然としてあるものと、ずっと以前から哲学の実質であったものとは、各人の悟性にとっての普遍妥当性の意味での認識ではなく、哲学的信仰の解明という思考の動きである。」<sup>54)</sup> 哲学と科学は、両者の真理のまったく異なっている根源での洞察による両者の分離と、それに起因する両者の認識の方法の分離とに依じて、実際解決できずに互いに関係がある。「科学性がそもそも存在すべきであること、知識への意欲の真剣さと危険、関与の無制約性は、哲学的にのみ解明されるべきであるし、信仰に由来する。」<sup>55)</sup> それぞれの思惟の真理にとって決定的な点は、諸科学と哲学において別々に存在する。その点は、諸科学にあっては、徹頭徹尾対象的な事柄、思惟されたもの、判断にある。哲学においてはその点は、内的外的行為の現実性、心の状態、決意にある。「検証は、諸科学では対象的研究、調査・検査に頼り、哲学では実存の現実性に頼る。」<sup>56)</sup>

さて、ヤスパースによれば、哲学することと啓示信仰は区別されるが、哲学することは啓示信仰を要素として取り入れる。「哲学することの真实性は、啓示信仰を理解できないものの厳密さにおいて存続させることを、自ら要求する。啓示信仰は、その陳述において、たくさんの矛盾の合理的思惟として存在し、不一致を通して行為と実存することにおいて現われ出る。」<sup>57)</sup> しかし、この諸々の矛盾と不一致は、それ自体信仰の要素となり、強くなり、自覚される。啓示は現われる。と



ころが、それは隠すように現われる。

ヤスパースによれば、人間の本性は、生理学的・心理学的に研究可能な対象としてあるものではない。本来の理性は、正当な強制的認識に対する能力のある意識一般の要点としての、単なる悟性では言い尽くせない。「人間の《本性》はむしろ、実存として自分自身に贈られていることにおいて世界を見て、存在するものを洞察し、諸々の暗号によって動かされ、決意において決定する本質である。超越者への関係は、そこからわれわれが生きるものである。」<sup>58)</sup> 哲学的信仰は、超越者によって実存として自分自身に贈られていることを根拠とする。

それゆえ、ヤスパースによれば、「啓示信仰を断念することは、不敬の結果ではなく、超越者によって自由なものとして創造された実存の信仰の結果である。」<sup>59)</sup> 哲学的信仰は、啓示を求めず、人間相互の関係の中に真理を見出す。ヤスパースは、「超越者へ向けられた秘密から、その人に近づきうる真理とすべての人間の遠い未来を追う哲学的信仰は、その曖昧さの運動における暗号のために、実際の啓示を断念しなければならない。この哲学的信仰は、多くの形態で現われるが、権威にならず、教義にならず、必然的にお互いに語るが、しかし必ずしも一緒に祈らなくてもよい人間たちの交わりを頼りにしている」<sup>60)</sup> と述べている。

#### 4. 哲学的根本知としての包括者の諸様式

ヤスパースは、われわれが世界の中でどのような在り方をしているかを意識することを、「哲学的根本知 (das philosophische Grundwissen)」と捉えるが、これは包括者の諸様式の哲学を意味する。彼は、意識とは、主観と客観への分裂という根本現象であると捉える。彼は、「現象の場所が主観と客観に分裂されたものを、われわれは包括者と名づける」<sup>61)</sup> と述べている。

ヤスパースによれば、われわれは、個人的に異なり、体験する現実的な意識においてすべての

人々に共通な意識を、意識一般と呼ぶ。意識一般は、多くの人々の偶然の主観性ではなく、一般的なものと普遍妥当的なものを対象的に把握する一つの主観性である。現存在は、それに対応し、それへ影響を及ぼす自己の環境の中にある。現存在は、自分自身に対する反省をしないで、自分の世界の中で生きることの体験として存在する。精神とは、われわれが想像力によって形成物を計画し、意義に満ちた世界の状態を作品において実現させる包括者としてのわれわれである。精神の主体は、想像力である。そして、「全体は理念と呼ばれている。精神の本来の理念 (ヘーゲルの理念) は閉ざされている。理性の理念 (カントの理念) は開かれている。」<sup>62)</sup> ヤスパースは、「しかしこの根拠、この自由、私は私自身であり、他の自己とともに交わりの中で私自身となりうるということ、これをわれわれは可能の実存と呼ぶ」<sup>63)</sup> という。

ところで、ヤスパースによれば、実存は、そのようなものとして明瞭に観察されえない。実存は、そこにある存在ではなく、存在可能である。つまり、私は実存ではなく、可能の実存である。私は私を保持するのではなく、私になるのである。「実存は、自己自身に振る舞い、それによって措定されている力に関係しているのを心得ている自己である (キルケゴール)」<sup>64)</sup> 実存は、超越者がなくては自由ではなく、超越者によって与えられているのを心得ている。実存は、おのおの単独者として、この自己として、代替できず、掛け替えのないものである。私は私の決断によって、私であるものになる。「実存は、無からではなく、超越者の中で自己に与えられることにおける決意の存在可能である。」<sup>65)</sup>

また、ヤスパースによれば、「実存は歴史的である。」<sup>66)</sup> 伝承の継続と破壊を伴う単なる消え去ることとしての歴史と違い、実存は、永遠なものから現在のものになることとして時間の中で自己が自己自身になることである。「実存は、実存たちの交わりの中でのみ存在する。」<sup>67)</sup> 私は、私が

実存するという知識によっては、現実的な実存でありえない。実存は、自己に与えられているのを知っているがゆえに、根本においては隠されている。

さらに、ヤスパースによれば、存在そのものであり、われわれが包括者として存在するものによって包まれている包括者は、世界と超越者といわれる。存在そのものである包括者は、同時にいかなる様式でもわれわれにとって客観とならないようなものである。ヤスパースは、「しかし超越者をわれわれは絶対に探求できず、われわれは超越者によって——たとえば——心を動かされ、そしてわれわれは超越者を他者、すなわちすべての包括者の包括者として心に感じる」<sup>68)</sup>と述べている。

ヤスパースは、哲学的根本知の意義について、「われわれが世界の中に存在するようなことの根本知は、存在しない全体知を放棄する」<sup>69)</sup>という。根本知は、われわれの思惟を通して、世界や人間のありさまを捉えようとするが、全体知は、すべてを知り尽くしていると思ひ込む知であり、完全なる知であると錯覚する知である。彼によれば、「根本知は、十分に定義された概念が到達しないところで、批判的な区別によって明らかになる。」<sup>70)</sup>彼は、根本知はわれわれの清明さを増進すると考える。

ヤスパースは、包括者における理性の役割について、「超越者がすべての包括者の包括者であり、実存が基盤であるならば、理性は、時間の中で実現する紐帯である」<sup>71)</sup>と述べている。理性は、包括者の諸様式の紐帯であり、人間と人間を結びつけるものである。「われわれは、われわれの課題、すなわち哲学の課題を結合の道、交わりの道に至ることに見ている。存在そのものが超越者によって包まれている包括者のすべての様式は、われわれにおいては包括者のすべての様式の紐帯、すなわち理性によって包まれている。」<sup>72)</sup>

ヤスパースによれば、理性は、われわれが頼りにしながら実現させる道を示す。「理性は、超越

者においてすべての包括者の包括者であるように、内在において、絶対化したいすべてのものに先立って存在するものである。」<sup>73)</sup>理性は、実存と結びついている。「理性は、理性に誠実さを授ける実存と結託して働く。理性は、すべての考えられるものを越えて、すべてが向けられる一者によって引き寄せられる世界の中での動きである。」<sup>74)</sup>したがって、理性と哲学することは密接に関連する。「実際に、ここではこの理性という包括者において、運動の空間があり、この運動へ達することが哲学することの課題である。しかし、哲学することはこの真空では達成されることができず、包括者のすべての様式において実現することができる。包括者のすべての様式の内容は、一者へ至る紐帯をすべての側面に応じて求めることによって、初めて明瞭で純粹になる。」<sup>75)</sup>

## 5. 哲学的根本操作

ヤスパースは、われわれがいかにか、どこに存在しているかについての自己確信について、哲学的根本知によって探ることに関して次のようにいう。「つまり、われわれは存在の諸層ではなく、主観-客観-関係の根源を求めないのであり、対象的な定義の世界を存在論的にはなく、主観-客観がお互いに重なり合って関係しながら生じる主観-客観-関係の根拠を、包括者存在論的に求めるのである。」<sup>76)</sup>包括者の諸様式は多面的であるが、包括者は存在の全体である。「確かに結局、包括者は一つであり、すべての包括者の包括者であり、超越者である。われわれが可能の実存である限り、われわれは超越者をそのようなものと見なし、われわれは超越者に直接かかわる。」<sup>77)</sup>しかしわれわれは、超越者から包括者の諸様式を導き出せないし、思惟において適切に超越者自身に到達できない。「包括者の諸様式は根本的現実性であり、その緊張状態の中でわれわれは事実上生きている。」<sup>78)</sup>

ヤスパースは、「哲学的根本操作 (die philosophische Grundoperation)」という概念を用いる。彼は、「わ



れわれが世界の中でどのように存在しているかを、包括者の諸様式を通して確かめるために、思考においてなされることを、われわれは哲学的根本操作と称する<sup>79)</sup>という。この哲学的根本操作は、われわれが対象へ向けられ、対象に結びつけられる主観-客観-分裂から、主観でも客観でもない包括者への転換を実行する。「主観と客観を自己自身の内に閉じ込め、それでも再び思惟される包括者が、だから主観に対して存立する客観となるように見えるという二律背反において、絶えず繰り返される根本操作のみが、あらゆる現在へ導くことができる。」<sup>80)</sup>したがって、哲学的根本操作が同時に実行し、自覚させる転換は、われわれが人間として初めて真の人間となる回心の一契機である。

そこで、転換において実現された思惟の転倒が見られる。ヤスパースによれば、「われわれの根本状況を解明する言葉が、存在の陳述に変えられる場合、解放する転換との対比において、哲学することは、それを通して自分で制限する転倒に陥る。」<sup>81)</sup>西洋の哲学することの歴史において、その哲学することの過程にとって不可欠である即事性は、絶えず現われる。この即事性は、科学的性格の研究対象となり、独立した、哲学に左右されない根拠を獲得するか、または、存在認識ではなく、浮動し消滅する超越者の言葉を意味する暗号である。ヤスパースは、次のように述べている。「一般的には哲学することに対して、次のようにいえる。すなわち、科学の単なる意識一般と違い、哲学することの客観的即事性はそれを越えて、思惟する者の実存と包括者のすべての様式における彼の経験に結びついている」<sup>82)</sup>と。

さて、ヤスパースは、包括者の自己確信に関して、「包括者においては、主観の自己確信は、同時に客観の自己確信とその意味の多様性における主観客観両者の自己確信とともに生じる。自己確信は同時に存在確信である」<sup>83)</sup>と述べている。彼は、われわれが主観-客観-分裂を越えて、その根拠、万物とわれわれ自身との根源へと達しよ

うとする場合、二つの道によって可能であると説明する<sup>84)</sup>。

第一に、神秘的経験へ入ることによる度を越えること。主観と客観の神秘的合一は、諸々の対象と同時に、あらゆる形態における自我を消滅させる。

第二に、そのようなものとしての包括者の覚知によって分裂を越え出ることが生じる。この越え出ることが、抽象的な指示に代わって、思惟する人間自身の気分で実現される時、この哲学的根本操作を通して人間の自己意識の転換が起こってくる。

ヤスパースは、主観性と客観性の賭けに関して、主観的性格だけの確信は真理ではなく、主観的性格の客観と一緒に確信が真理であると考えている。彼は、こうした立場を、キルケゴールの主体性に関する命題によって説明している。「キルケゴールの命題《主体性が真理である》は、単に《講義する》だけの哲学者、神学者、牧師たちに対して彼によって意識的に挑戦して書かれている。まさしくキルケゴールは、彼らに対してここで原則的に別の特質を意識させることによって、この実存的主観性の中に客観性を確保した。」<sup>85)</sup>

ヤスパースによれば、包括者の諸様式の確信は、主観と客観、主観性と客観性の対立を防止することを可能にする。「包括者のそれぞれの様式において、主観-客観の分裂と両者の重なり合う関係は、独特なものである。すなわち、意識一般においては、対象へ意図して向かう存在。現存在においては、内界と外界との関係として、精神においては、想像力と形成物との関係。実存においては、それによって私が存在する超越者に関係している自由としての私自身。」<sup>86)</sup>現象にとっては、客観がないいかなる主観も、主観がないいかなる客観も存在しないということが、常に妥当する。「つまり、超越者への関係を持たないいかなる実存も存在しない。」<sup>87)</sup>実存は、自分を取り巻く世界から超越者への飛躍、すなわち内在から超越への飛躍をする。この飛躍によって、われわれは世

界に対して自由となる。結局われわれは、超越者へのかかわりにおけるわれわれ自身として自由となる。

## 6. 普遍的根本知の理念

ヤスパースによれば、哲学的信仰は、一つの真理への転倒を防止する。一つの真理というものの虚偽性は、包括者の個々の様式の絶対化によって発生する<sup>88)</sup>。現存在は、いわゆるプラグマティズム、生物主義、心理主義、社会学主義で絶対化され、意識一般は合理主義で、精神は教養で、実存は実存主義（これはニヒリズムになる）で、世界は唯物論、自然主義、観念論、汎神論で、超越者は無世界論で絶対化される。ただ理性のみは、絶対化されえない。理性は、さらに突き進めば進むほど、それだけますます真実となる。理性は、特有のそれにふさわしい客観化と主観化を持たない。

ヤスパースによれば、包括者の確信は信仰の確信である。「客観も主観も失われることなく、むしろ両者が一者においていつまでも現在のにある包括者の実現を、われわれは最も広い意味で信仰と呼び、包括者の確信を信仰確信と呼ぶ。われわれは、実存と超越者の確信において、高められた、内在を越えて広がる意味での信仰に出会う。哲学することに不可欠な意味としての理性の確信は、哲学的信仰に最も特有力として哲学的信仰に属する理性信仰を解明する。」<sup>89)</sup> 彼は、哲学的信仰における根本知は、存在の知識としての存在論ではなく、包括者の確信としての「包括者存在論 (Periechontologie)」を考えているので、異なった特質を獲得している。「したがって根本知は、その都度の形態にあると同時に、それを思惟し、その中で生きている人間の内面的状態の様式である。」<sup>90)</sup> 包括者の諸様式の根本知はまた、一つの内面的状態に対応する。ところがそれは、ただ空間を広げ、根源を指示し、この空間の実現を通して補完を要求するような一つの内面的状態である。

こうしてヤスパースは、普遍的根本知の理念について次のようにいう。「理念とは次のことである。すなわち、われわれが包括者を、われわれが出会い、われわれにとって共通なものとして確かめるならば、われわれは、われわれが生きている根源、すなわち見通しが見つからないくらい多様に分けられた根源において、われわれを相互に自由にすることができる。」<sup>91)</sup> このような根本知の理念は、次のことが重要である。「地球上のすべての人間が、本質的に結合一般の形式として計画されている普遍的理性に、結局共通に基づくことができるかどうか、問題である。」根本知の展開は、科学のように説得力があり普遍妥当的な認識へ導かないにもかかわらず、とにかくそれ自身は何らかの信仰をも表わそうとしない。「根本知の展開は、科学的認識と実存的哲学の境界線上にある。」<sup>92)</sup>

ヤスパースは、根本知と実存との関係について、「包括者の思惟における表出の相対性は、実存することの誠実さに対応する」<sup>93)</sup> という。包括者の思惟において、次のことが明白になる。「思惟は、単なる定立であり、解明であるにすぎない。それは一つの手段である。したがって哲学は、なおのこと思想上の展開の厳密さにおいてではなく、思惟する者の生活実践において初めて、自己自身を証明する。」<sup>94)</sup> 一つの根本知という理念に対応する異議は、ここでもまったく信仰が基準となっている。実際に一つの信仰が根底において活動している。この信仰は、真理とは、われわれを結びつけるものであるという信仰である。

## 7. 哲学的信仰と包括者

ヤスパースによれば、哲学的信仰は、神の啓示に基づく啓示信仰と異なり、啓示を理解できないが、別のものに対する可能性と見なす。哲学的信仰は、思惟する人間の信仰であり、常に知識と結びついてのみある。哲学的信仰は、自分自身を解明することを欲する。哲学的信仰は伝統の内にあり、哲学史を通じて人間の生き方と真理を探究する。

ヤスパースは、哲学的信仰の立場を考える際、科学、哲学、神学という三分類の観点から捉える。哲学は、科学と啓示信仰との間の、一つの独立した根源である。哲学することと啓示信仰は区別されるが、哲学することは啓示信仰を要素として取り入れる。ここに哲学と神学の関連が見られる。哲学的信仰では、暗号を介して超越者と連繋するが、啓示信仰では、啓示が神の現われにほかならない。したがって、啓示信仰を断念することは、超越者によって贈られている実存の信仰の結果である。

ヤスパースは、信仰について語る場合、主観と客観を包括するもの、すなわち包括者を念頭に置く。包括者は、諸様式の形で姿を現わす。包括者は、われわれを包んでいる存在は、世界と超越者といわれ、われわれである存在は、現存在、意識一般、精神、さらに実存といわれる。したがって、信仰は包括者からの生き方であり、包括者によって導かれ成就することである。

ヤスパースは、哲学的信仰の内容の範囲を、次の四つの要素によって示す。第一に、私が知っているすべては、主観-客観-分裂の内にある。第二に、客観でも主観でもなく、主観-客観-分裂の全体において現象する本来的存在を、包括者と名づけた。第三に、われわれである包括者の各々の様式の中に、真実存在の固有の意味として真理が存在する。第四に、あらゆる真理が思惟の独特な仕方では現にあることは、範疇論と方法論の内では自覚される。またヤスパースは、哲学的信仰の内容を、「神は存在する」、「無制約的な要求がある」、「世界は、神と実存との間で消滅していく現存在である」という三つの命題で表現する。

ヤスパースは、われわれが世界の中でどのような在り方をしているかを意識することを哲学的根本知と捉えるが、これは包括者の諸様式の哲学を意味する。その際、現象の場所が主観と客観に分裂されたものを、包括者と名づける。またヤスパースは、われわれが世界の中でどのように存在しているかを、包括者の諸様式を通して確かめる

ために、思考においてなされることを、哲学的根本操作と称する。この哲学的根本操作は、主観-客観-分裂から、主観でも客観でもない包括者への転換を実行する。したがって、哲学的根本操作が同時に実行し、自覚させる転換は、われわれが真の人間となる回心の一契機である。

哲学的信仰は、包括者の個々の様式の絶対化によって発生する、一つの真理という虚偽性を防止する。包括者の諸様式の中でも、理性だけは絶対化されない。理性は、特有の客観化と主観化を持たない。ヤスパースは、客観も主観も失われることなく、むしろ両者が一者、すなわち超越者においていつまでも現存的にある包括者の実現を広い意味で信仰と呼び、包括者の確信を信仰確信と呼ぶ。彼は、哲学的信仰における根本知は、存在の知識としての存在論ではなく、包括者の確信としての包括者存在論であることを主張する。包括者存在論は、実存と理性が結びついていることを明らかにする。

実存は、存在可能であり、私は実存ではなく、可能の実存である。実存は、超越者によって与えられているのを心得ている。実存は、おのおの単独者として、この自己として、代替できず、掛け替えのないものである。実存は歴史的である。実存は、実存たちの交わりの中でのみ存在する。

理性は、哲学する道の途上でわれわれを導き、真に哲学的に生きるために働く。理性は、包括者の諸様式の紐帯である。理性は、真理の意味のすべての様式を有効にすることによって、互いに生み出す。理性は常に、実存と結びついて機能し、理性自身が全体的な交わりの意志である。理性は、超越者においてすべての包括者の包括者であるように、内在において、絶対化したいすべてのものに先立って存在するものである。理性は、理性に誠実さを授ける実存と結託して働く。

## むすび

ヤスパースにおける哲学的信仰は、科学と啓示信仰との間で、哲学することを根源とする信仰で



ある。彼は、信仰について考察する際、主観と客観を包括する包括者を前提とする。したがって、哲学的信仰の概念を獲得するためには、包括者を解明しなければならない。

ヤスパースは、われわれが世界の中でどのような在り方をしているかを意識することを、哲学的根本知と捉え、この哲学的根本知は、包括者の諸様式の哲学を意味する。この場合、現象の場所が主観と客観に分裂されたものを、包括者と名づけている。またヤスパースは、われわれが世界の中でどのように存在しているかを、包括者の諸様式を通して確かめる思考を、哲学的根本操作と称する。

こうして哲学的信仰は、包括者の諸様式の哲学に基づく信仰であることが明らかになる。哲学的信仰の主体は、実存である。実存は、超越者がなくては存在せず、理性がなくては包括者の他の諸様式と結びつくことができず、他の実存と交わりに入ることができない。

われわれは、われわれである存在として、現存在、意識一般、精神と段階的に高度となり、実存へと飛躍する。その場合、実存は、自分を取り巻く世界から超越者への飛躍をすることになる。この飛躍によって、われわれは世界に対して自由となる。最終的にわれわれは、超越者へのかかわりにおけるわれわれ自身として自由となる。つまり実存は、自由の中での主体的な決断によって倫理的生き方を通して、超越者と連繋する。それゆえ哲学的信仰は、包括者の諸様式の哲学として、すべての包括者の包括者である超越者から贈られている実存の倫理性をその根源から示唆しているといえよう。

注

- 1) Karl Jaspers, Gesamtausgabe, Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung, Band I/13, Schwabe Verlag Basel, 2016,S.121.
- 2) Vgl. K. Jaspers, Der philosophische Glaube, R. Piper & Co. Verlag, München 1948,7.Aufl.

- 1981,S.13.
- 3) ibid.,S.13.
- 4) ibid.,S.14-15.
- 5) ibid.,S.15.
- 6) ibid.,S.16.
- 7) ibid.,S.17.
- 8) ibid.,S.17.
- 9) ibid.,S.17.
- 10) ibid.,S.17.
- 11) ibid.,S.17.
- 12) ibid.,S.18.
- 13) ibid.,S.18.
- 14) ibid.,S.18.
- 15) ibid.,S.19.
- 16) ibid.,S.20.
- 17) ibid.,S.20.
- 18) ibid.,S.20.
- 19) ibid.,S.20.
- 20) ibid.,S.20.
- 21) ibid.,S.21.
- 22) ibid.,S.22.
- 23) ibid.,S.22.
- 24) ibid.,S.23.
- 25) ibid.,S.24.
- 26) ibid.,S.24.
- 27) ibid.,S.25.
- 28) ibid.,S.25-26.
- 29) ibid.,S.26.
- 30) ibid.,S.26.
- 31) ibid.,S.27.
- 32) ibid.,S.27.
- 33) ibid.,S.28.
- 34) ibid.,S.28.
- 35) Vgl.ibid.,S.29.
- 36) ibid.,S.29.
- 37) ibid.,S.31.
- 38) ibid.,S.32.
- 39) ibid.,S.32.
- 40) ibid.,S.32.

- 41) Vgl. *ibid.*, S.33.  
42) *ibid.*, S.33.  
43) *ibid.*, S.33.  
44) *ibid.*, S.38.  
45) *ibid.*, S.38.  
46) *ibid.*, S.38.  
47) *ibid.*, S.39.  
48) *ibid.*, S.39.  
49) *ibid.*, S.39.  
50) *ibid.*, S.40.  
51) *ibid.*, S.40.  
52) Vgl. Karl Jaspers Gesamtausgabe, Der philosophische Glaube angesichts der Offenbarung, Band I/13, a.a.O., S.167.  
53) *ibid.*, S.168.  
54) *ibid.*, S.170.  
55) *ibid.*, S.170.  
56) *ibid.*, S.171.  
57) *ibid.*, S.176.  
58) *ibid.*, S.178.  
59) *ibid.*, S.178.  
60) *ibid.*, S.179.  
61) *ibid.*, S.181.  
62) *ibid.*, S.183.  
63) *ibid.*, S.184.  
64) *ibid.*, S.185.  
65) *ibid.*, S.186.  
66) *ibid.*, S.187.  
67) *ibid.*, S.187.  
68) *ibid.*, S.188.  
69) *ibid.*, S.190.  
70) *ibid.*, S.190.  
71) *ibid.*, S.192.  
72) *ibid.*, S.192.  
73) *ibid.*, S.193.  
74) *ibid.*, S.193.  
75) *ibid.*, S.194.  
76) *ibid.*, S.195.  
77) *ibid.*, S.196.  
78) *ibid.*, S.196.  
79) *ibid.*, S.197.  
80) *ibid.*, S.197.  
81) *ibid.*, S.198.  
82) *ibid.*, S.199.  
83) *ibid.*, S.199.  
84) Vgl. *ibid.*, S.199-200.  
85) *ibid.*, S.201.  
86) *ibid.*, S.201.  
87) *ibid.*, S.201.  
88) Vgl. *ibid.*, S.204.  
89) *ibid.*, S.205.  
90) *ibid.*, S.208.  
91) *ibid.*, S.208.  
92) *ibid.*, S.210.  
93) *ibid.*, S.210.  
94) *ibid.*, S.211.

#### 参考文献

1. カール・ヤスパース, 林田新二監訳, 中山剛史・平野明彦・深谷潤訳『哲学的信仰』理想社, 1998年.
2. カール・ヤスパース, 重田英世訳『啓示に面しての哲学的信仰』創文社, 1986年.